

辛亥以後の書法思想について

著者 姜 澄清（貴州大学）
監訳 河内 利治（大東文化大学）
訳者 鎌田 美里（修士課程二年）
宮木 繭子（修士課程二年）
幸喜 洋人（修士課程一年）
西原 大輔（修士課程一年）
高橋由利子（修士課程一年）
藤田 尚美（修士課程一年）
藤森 大雅（修士課程一年）

【解題】本稿は、姜澄清著『中国書法思想史』河南美術出版社1994年3月発行所収の「附：辛亥後書法思想的簡介」（同書208頁～218頁）の訳注である。大学院文学研究科書道学専攻修士課程の開講科目「中国書学・書法特殊研究（二）」において講読した同題の文章を、訳者が分担して発表し、監訳者がその訳注原稿の記載の統一を図ったものである。

1904年（光緒30年）に科挙が廃止され、辛亥の年（1911）に、清の統治がついに終結した。これによって、いわゆる「新学」（注1）が日増しに私塾に取って代わり、科学が大いに興った。20世紀の初め、海外に留学したり、視察のために出国する者が数千人を超え、ヨーロッパからも極めて実用的で便利な書写工具が輸入された。一般の知識人は科挙の束縛から解放され、群起して科学を学ぶものがあらわれたことにより、書法に没頭するものが少なくなった。しかし、実用と分離したことが、書法をして徐々に絵画と同様の専門芸術にしていっていった。科学の発達につれて、印刷技術が日増しに精巧になり、碑帖や墨跡が影印刊行され、過去に千金もした高価な秘宝の影印本が、どこでも安値で手に入れられるようになった。そのうえ、宮中に珍藏されていた秘宝が、公開で展示された。昔の人が見ることが難しかった真跡の墨宝は、当時の人は難なく見ることができ、真に書道に心をとどめる人は、当時実際に容易に見られるようになった。

しかし、科学が大いに興り、科挙制度が廃止されてまもなくは、実用を重んじ、能率を追求することが、社会生活の趨勢であった。20世紀の初め、知識階層の多くはヨーロッパや日本から救国の術策を求めるために国故（注2）を捨て去り、書法を無用の「小芸」とみなした。辛亥後、若い世代で書法に志を立て没頭する人は稀で、名を馳せることができた者の多くは、前代清朝からの逸士であり、新時代の人間はせいぜい書法を余興とみなし、たまに行うぐらいであった。

しかし、上手に書ける人が日々減少し、書法思想は面目を一新した。西洋文芸学の輸入は、何人かの学者に新しい視点から書法を見ることを試みさせ、蔡元培（注3）は書法を美術教育の手段と考えて、北京大学で先頭に立って提唱し、康有為（注4）の門人である梁啓超（注5）は全く新しい観点をを用いて書法を解釈した。その後、北京大学で教壇に立った朱光潜（注6）、宗白華（注7）が一步進めて論文を著し、現代の書法美学の基礎をかためた。この新学は、伝統的な書論と趣きが大いに異なり、専門的は著作が少ないとはいえ、当時の人々の耳目を一新した。

唐宋以来、清代に至るまで、文人が集まって、詩文を語りあい書画を論じることは、長年にわたる習慣である。自分の学問を持ち、優雅に世俗を超越することを目標とすることによって、たがいに詩文をやりとりし、たがいに題字を贈りあい、書画に切磋琢磨した。したがって、書論や画論についての書物が甚だ多いのである。文人は書を知らなければ文人とみなすには不十分である。辛亥前後の社会の気風が大いに変わり、知識人は必ず「民主」（注8）、

科学（注9）」と言って、全身で科学によって国を救い、民主をもって国を救うことを求めた。ある時期は、見るもの話すもの全てを「国粹（注10）」とみなして陳腐であると考えた。新しい時代に筆墨に親しむ者は稀で、書壇の精鋭は多くが清朝からの逸士であった。しかし、結社（注11）が辛亥以後に始まるものの、歴代の文人墨客（注12）が、互いに面識を持ち交流する時の、正式な社会団体組織は無かった。辛亥以後の「書法研究会」の類の団体も文学結社と同じように、時代の流れにそって生まれたが、その結社の数は極めて少なく、とうてい文学結社と同列に論じることができない。

辛亥以後の書家を年齢の高いものからあげると、康有為、呉昌碩（注13）、鄭孝胥（注14）、陳宝琛（注15）らがあり、すべて清朝からの逸士であり、民国時代の書家には、趙世駿（注16）、譚延闓（注17）、梁啓超、曾熙（注18）、姚華（注19）、于右任（注20）らがいる。康有為の碑学の提唱を経、また康氏の高弟である梁啓超の六朝碑刻の宣伝により、民国時代の学書は、多くが碑刻と法帖をともに重視し、それぞれの体を兼習し、そしてその新しい状況によって書壇に新しい説を主張するようになった。

辛亥後の書法は、これまでにない二つの文物の発見により大きな影響を受けた。すなわち甲骨と簡牘（注21）の出土は現代の人に大きな感動を与えるものである。

甲骨は最初、清末に出土し、その後また何度も発見された。甲骨は殷代の歴史や文字を研究する確かな史書の材料であるだけでなく、刀で刻す、または朱で書いた後に刻す文字であり、事実上中国で最も古い書法作品である。それは多くの書法家の専門的研究による摹本を生んだばかりか、その発見によって、周代以前の書法の実際状況がついに明らかになった。

簡牘も清末に出土し、大量の発見が二度あり、一度は30年代中頃、もう一度は70年代初期である。簡牘は漢代の遺物であり、その数量は莫大で、文字が多く、人びとは驚嘆した。とりわけ貴重なのは筆で書かれた真跡であることである。

この二大発見は、現代人の視野を大いに広げた。これ以前の古代人はただ金石、絹帛や、殷周の青銅器を知っているだけであるが、現代人は古代人が見られなかった古い時代の遺物を得たのである。

わずかに上述した出土品の書法の真跡は、ちょうど中国書法史上の一つの低迷期にあたるため、歴史学に与えた影響は大きかったが、書法への影響はかなり小さかった。それは決して真跡の価値がわずかであったからではなく、人々が重視しなかったからである。しかし現代の印刷技術が精巧であることにより、甲骨と簡牘は大量に印刷発行され、一方で臨摹する者にとって非常に便利になり、また一方でその特別な趣きが審美思想の世界を開拓した。

近現代の書法創作の実際の成果は、必ずしもまだ古代人を超えていないだろうが、新しいもの、珍しいものを求めるという創作思想だけは清代よりも進んだ。その原因の一つは、現代人は周漢の金石以外の珍しい書跡を見ることができ、古代人は碑帖を手元に置いて、見ることにすら稀であったからである。

この時期、理論の研究ではたくさんの新しい思想があり、社会的な風潮を変えるもので、初期には梁啓超、蔡元培がいる。

梁啓超は、康有為の弟子であり、依然として六朝碑を学ぶことを主張するが、彼の先生のように唐人を蔑視していない。彼の大きな貢献は、全く新しい芸術思想で書法を解釈したことにある。精華大学教職員書法研究会の席上、「書法指導」（注22）の講演を行い、それを周傳儒がノートに取ったものが、『飲冰室合集』専集第23冊に収められている。

「書法指導」は、得がたい文献資料であり、なかでも「書法在美術上の価値」は、最も重大な意義を持つ。

梁啓超は、閉鎖的な知識人ではなく、欧米のあちらこちらへ出かけ、中国と西洋の学問に精通していた。そのため、論書において二度と晋唐の人を話題に取り上げなかった。彼は、字を書くことが美術になりうる理由は、用いる道具によるからであり、万年筆や鉛筆ではなく、表現力に富んでいる毛筆だからである、と提起した。字を書くことは、他の美術（絵画・彫刻）とは異なり、その道具には「四つの美」、すなわち「線の美」、「力の美」、「光の

美]、「個性の表現」があるからであり、それゆえ「さまざまな美術のうち、字を書くことは最高である」と考えた。当然ながらこの四点は、古代人が決して言及しなかったわけではないが、言及しても一端を取り上げるだけで他を論じておらず、論じたとしても詳しくなく、単に大意を述べるにすぎない。梁啓超が明確に提起した、彼の言う四つの点は、今日に至っても動かし難いものである。今日から見れば、梁啓超の述べた四つの点は、おおまかに現代の書法美学の理論の枠組を固めたものである。足りないと感じるのは、この四つの点をめぐって、一歩進んだ論述がなされなかったことである。「書法指導」が欧米の美学文芸思想の影響を受けていることは明らかであり、その当時、美学も少しずつ中国で紹介されるようになり、宣伝力が最も大きかったのは蔡元培を挙げるべきである。1921年10月、蔡元培は北京大学にて「美学」の科目を講義し、同月に『美学通論』を書きはじめた。彼は美術教育を宗教に代えることを主張した。この教育思想の指導のもと、北京大学で担当する校務をはじめとして、各種の研究會を發起することを手がけた。その中に「書法研究會」があり、初代の書法研究會會長が沈尹默（注23）である。蔡元培には書法における専門論文はないが、芸術が生み出す影響を主張したので、過少評価できない。その原因は、当然ながら彼自身の極めて高い人徳と、北京大学（注24）が学界の卓越した人物の一堂に会する場所だからである。

蔡元培は1917年、北京大学の校務をとりしきり、沈尹默はそれ以前（1913年）から北京大学の教員を務めている。蔡は就任する前に沈先生を訪ねており、二人は親密に往来した。それゆえ北京大学は北方書法の活動の中心になったのである。

沈尹默の書学思想は、依然として晋唐を尊び、二王をその中心としており、康有為や梁啓超が北碑を重んじたのとは状況が異なり、梁任公（啓超）が新しい觀念をもって書法を見たのとも異なる。沈尹默の歴史上の功績は、1920年代以降、特に50年代以降における書法が、彼の貢献と努力によって継承されたことにある。1943年に沈尹默は『執筆五字法』を著したが、これが彼の最初に書法を論じた著作である。この論文は、五字執筆法と四字撥鐙法の混在をはっきりと分けたものである。翌年、『世界美術大辞典』を主筆したオランダ人の高羅佩（ファン・フーリック）（注25）は、沈尹默を民間第一の大書家と称賛した。1949年までの数十年間、沈尹默は絶えず臨書学習し、非常に多くの題跋を書き、考訂、鑑賞および技巧研究の上に学術の力を発揮している。

沈尹默と学問を修める方法が似ているのは馬宗霍、祝嘉の両先生である。

1935年に商務印書館から馬宗霍の『書林藻鑑』（注26）と『書林紀事』（注27）が出版された。二書はどちらも資料を集成した性格のもので、時代的順序だてと人物により編集されている。『書林藻鑑』は全部で1817人の人物を収め、上は伝説上の倉頡造字時代に始まり、下は清末までである。『書林紀事』は書法家にまつわる故事史実を七百余り収集しており、同じように時代の順序と人物で編集している。『書林藻鑑』は各時代の書家を紹介する前に、当該時代の書史の略述があり、簡にして要を得ており、十分に価値がある。この体裁は、宋末元初の陶九成（注28）の『書史会要』（注29）とは異なる。陶書は、ただ書家を簡単に批評して紹介しているだけである。同時に馬宗霍のこの書物の体裁はまたその後祝嘉先生に模倣され、『書学史』（注30）が編纂されている。

『書学史』は1940年に書きあがり、于右任が1941年に序文を書き、その序に「材を取ること甚だ富み、眉列するも亦た詳かなり、書道に志す者有らば、この一編を手に入れば、搜検の勞を免るべし」と称えている。

上述した二冊の書物より少し早く、30年代の初めに余紹宋氏（1883—1949）の『書画書録解題』がある。この書物は「史伝」、「作法」、「品藻」等の十類に分類し、歴代の重要な書画の著述を一つ一つ並べ、いずれについてもその価値を評論し、その真偽を考察するもので、学術価値のある非常に優れた大著である。林志鈞は「序」において高く称賛し、『漢書』芸文志と比べて、「『漢書』芸文志に通ぜずんば、以て天下の書を読むべからず。芸文志は、学問の眉目、著述の門戸なり」、「『書画書録解題』を読まずんば、以て中国書画芸術を論ずるべからず」と述べている。

以上の著書は、この数十年間で大きな影響を及ぼした学問を修める方法の著述であり、漢学の道を進んでいる。開拓を尊重せず、根柢を重要視している。

もし、以上の著述を「史」または「史料」とみなすならば、30、40年代の書法の芸術特質に対する研究、すなわち「論」の面ではかなり手薄である。立派な著書はほとんどなく、専門の論文さえも欠如していることは言うまでもない。数少ない学者が、その著書の中でわずかに書法に言及し、長篇の論文ではないが、先人が言っていないことを言っている。このような「新学派」は、二度と真偽の考証、文字の変化、碑を持ち上げ帖をけなすといった類の古いテーマを追いかけず、ただ書法の特長そのものの研究に重点を置いている。その中で、林語堂(注31)の論書の観念は最も新しい。

林氏は1934年と1936年に、『中国人』(注32)と『蘇東坡伝』(注33)を執筆した。この二冊の書物は、いずれも書法芸術に言及している。

林語堂は極めて深く西洋の文化を吸収し、かつ生まれ育った中国の文化に習熟していた。彼は中国と西洋の学問に精通した学者であり、作家である。彼は自ら作った一幅の対聯「両脚踏中西文化、一心評宇宙文章(両足で中国と西洋の文化をしっかりと踏まえ、一つの心で世界のあらゆる文章を批評する)」を座右の銘にした。彼はそのような学識とまなざしで逆の角度から観察し、中国文化の中でもっとも特異で奇異なのは書法である、とする全く新しい言い方をした。もし梁啓超が新学派の道を開いたというならば、林語堂は中庭に深く入り込んだ存在であると言える。

先人の論書は歴史的な縦軸の方向から探求しており、あるものは晋唐、あるものは宋元まで遡っているが、林氏は世界という大きな文化圏の視野から書法を詳細に見た。彼は「西洋芸術はつねに女性の人体、そこに最も理想的で、最も完璧な韻律を捜し求め、女性を靈感の源であるとみなす」(『中国人』)といい、しかし中国の「韻律に対する崇拜」は「書法芸術」の中から発展してきたものであり、「書法が代表する韻律」は「最も抽象の原則である」と指摘している。よって、「書法においてはじめて、私たちは中国人の芸術の心の極致を見ることができる」(同上)という。林氏は、中国人の純形式美に対して感じ取る力、この種の形式美に陶醉するかのような審美的恋着は、書法によって培われるものであると考えた。それゆえ、「中国書法およびその芸術的靈感を理解できなければ、中国の芸術を議論するすべがない」(『中国人』)と述べている。

『蘇東坡伝』では、林語堂は明確に書法の性質について指摘した。彼は「中国書法を抽象画の一種と見なせば、おそらくその特性を最もよく解釈できるであろう」とした。なぜならば「それはいかなる見分けられる物体も描かない」し、「抽象の構図」にすぎないからである。この「抽象の構図」は、「模倣」するものが自然の中の実物ではなく、ただ「自然の律動」にすぎないのである。

林語堂は「書法は中国人民に基本の美学を提供する」(『中国人』)と言っている。言い換えれば、中国美学の基礎は書法であり、書法の「韻律、形態、範囲等の基本概念は、中国芸術の各ジャンル、たとえば詩歌、絵画、建築、陶磁器や家屋の装飾に、基本の精神体系を与える」(同上)からである。書法に用いられる系統的で完全な術語、たとえば平衡、均整、虚実、対比、呼応、和諧(ハーモニーとバランス)等々に代表される観念は、「中華民族の美学観念の基礎」を形づくっている。

書法批評の基本原則は、これまで長い間もつれたままではっきりしない理論問題の一つである。林語堂は書法の抽象的な性質というこの基本点から出発して、「字を書くこと」は、ただ「線と結構の美しさを伝達すること」(『中国人』)にすぎず、絵画が客体(対象)を伝達するよう求めるのと似ておらず、それゆえ批評の基本原則は「全く文字の意味に関係しない」、つまり文字の内容にかまわず捨て去り、「ただ文字を抽象の構図とみなし」て、「中国書法のよしあしを判断する」(『蘇東坡伝』)と指摘した。

林語堂の理論の貢献はきわめて大きく、中国現代の書法美学は、彼によって理論的様態の構築がなされたと言えることができる。たとえば50年代初め、山東大学の許思園教授(注34)は、「昔から今まで、書法は最も普遍的で最も実用的な芸術であり、中国人の審美と修養は、まことにこれに基づいている。よって陶冶して世界中で最も形式美を鑑賞できる民族となった」と言い、さらに「民族文化を奮い起こすには、必ずこの芸術的境地の始まりを取り戻

さなければならない。そしてその根本は書法にある」(『中国文化研究集刊』第一集・許思園「論中国文化二題」)と言っている。

60年代初め、宗白華は、「中国書法の美学思想について」(注35)(『哲学研究』1962年第1期発表)において、書法は「全く絵画とは違って、直接、客観の形で模写するのではなく、かなり抽象的な点や線、筆画を通してはまだ、私達に感情や想像の中から形の骨、肉、血を体得させる。音楽や建築もまた、私達の感情に訴えることを通じて形で形を直感するように、人類の生活内容と意味を啓示する」と指摘した。これらの論説は、林語堂の書法美学思想と同じ体系に属するものである。

書法の創作についていうと、辛亥以後に文字改良の運動が興り、書法に大きく影響した。中国の文字で、複雑で難しすぎるものを考えると、書くのに時間がかかり、識字が容易でなく、文化の発展及び教育の普及と向上を妨げていることである。したがって、何人かの有識者で、ある人は拼音文字に変えることを主張し、ある人は簡略化して難しい文字を容易にするように主張し、根本の制度改変に反対した。後者には非常に書法と密接に関係する二つの意見がある。一つは章草を推進するもの、もう一つは標準草書を推進することを主張するものである。

章草の提唱に最も力を入れたのは、章太炎(注36)であり、太炎の弟子の銭玄同(注37)もまた同じように尽力した。彼らは章草が、漢字書写の最も簡易な構造であり、実用に有利であると考えたので、章草の法帖を捜し求め整理した。その後、この作業は卓君庸(注38)によって完成された。卓君庸は章草百数種を集め、並びに『章草考』を著し、さらに、『自青樹叢書』を出版した。この提唱により、章草で字を書く人がとても多く、30年前後には何人かの章草の名家が出現し、于右任に賞賛された王世鏜(注39)も章草を得意とした。

標準草書の推進者は于右任であり、最初は1932年に上海で提唱した。于氏は歴代の草書家の筆跡を広く収集し、一つの「標準」を選定して、1936年に上海文正楷印書局から初版の『標準草書』(注40)を出版した。これに呼応するように、標準草書研習会も成立した。この会は毎年一回、記念展覧会を挙行した。その影響は遠く日本、朝鮮にまで及んだ。しかしすでに最初の文字改革のモットーは失われており、純粋な書法芸術活動に発展した。

もとより辛亥以後の書法は、清の乾嘉時代後の尊碑思潮という大きな衝撃のもとにあったが、実際の書法は決してただひとつの流派にとらわれず、逆に多様に入り乱れる局面を呈した。康有為本人の書法は、帖派に入らず碑派にも入らない。このような繁栄と多様な局面は、まことに書法思想の活発な展開に起因するものである。甲骨や簡牘の大量の出土、欧米芸術思想の東伝、国内の文字改革の運動、筆記用具の変化、さらに個性解放の要求などにより、直接的間接的に書法に影響を与えた。これより書法は、もはや文人がひっそりとした書齋の中で一生懸命考えるような高潔なものではなくなった。1949年以降、台湾と中国の両方が共に明らかに政治を強化する傾向をうち出した。1950年に台湾は「反共美展」、「自由中国美展」を開催し、同年「美術協会」が成立した。その中には書法と篆刻が含まれていたが、その主旨は「美術界の人士を結合し、復国建国のために努力する」であった。

50年代、于右任らの書法の大家の推進によって、台湾では一つの書法ブームがおこった。それは書法と干渉しない政治風潮がそれを覆う状態であったが、実際には、書法は大いに盛んであった。一方、海峡の此岸(大陸)では、50年代に各種の芸術家協会が相次いで成立したものの、書法家協会(注41)だけはなかった。このことは、書法を芸術として認めないのと同じであり、そのため、書法の活動はただ民間の人々による細々とした運営がなされただけであった。1957年、書法の大家沈尹默が「右派」(注42)と見なされたため、民間の書法愛好者はよりいっそう怯えて警戒した。そこで国内で流行したものは、ただ新魏体と美術字のみであった。この種の字体は、スローガンの表記に最も適していたので、政治に奉仕したのである。

「文化大革命」の10年間、毛筆で書かれた「大字報」が一時流行した。これを「書法芸術」と呼ぶことはできないが、当時の青年はこれによって毛筆がどういうものかを認識しており、書法にとって関係しないものでもない。現在40歳以上の書法家で、「文化大革命」時代に書法の興味を育てた者が少なくない。80年代に入ると、書法はようやく全国規模の空前のブームがおこった。「書法ブーム」の出現の原因はとても複雑だが、なかでも思想界の「ルー

ツ探しブーム」や「民族自体の精神的な回復」の流れと最も関係がある。また政治が日ごとに開かれていくこととも関係がないわけではない。これは、まさに許思園先生が50年代初めに、「民族文化を奮い起こすには、必ずこの芸術的境地の始まりを取り戻さなければならない。そしてその根本は書法にある」と言ったことを表している。もしそのようでなければ、許思園先生の心配はきつと的中するであろう。彼は、同じ文章中に心配して、「中国民族は必ずその固有の芸術境地を回復しなければならない。さもないと、精神上の自立ができなくなり、将来はおそらく言うに忍びないことになるだろう」と言っている。ここでは、この至言を借りて本文の結びとする。

(訳注)

- 1 新学…ここでは中国の従来からある学問ではなく、西洋や日本などの新しい学問をさす。
- 2 国故…中国固有の学問。なお「国故整理運動」は、五四運動の影響を受けて、中国古典文化を科学的に批判、検討し、これを組織的に整理しようとした運動をいう。(平凡社『世界歴史辞典』第3巻、72頁)
- 3 蔡元培…1867～1940、近代中国の思想家、教育家。浙江省紹興の人。ドイツに留学して哲学を学び、理想主義精神と徹底した自由主義者の気魄をもって中華民国の新文化、新教育の育成に最大の影響力を残した。
- 4 康有為…1858～1927、字は広廈、号は長素、明夷、更正、天遊山人など。広東省南海県銀塘郷の人。春秋公羊学者、変法維新運動推進者。朱字琦の門に学び、経学・文学・掌故・性理・詞章の五学を兼習し、その根本を孔子に求めるという思想を受けた。康有為の書論に「広芸舟双楫」があり、論旨は従来の法帖中心の学習法「帖学」を否定し、碑版の拓によって学ぶべきことを主張した「碑学」を推している。(中村伸夫著『中国近代の書人たち』二玄社、2000年10月出版、以下5、13、14、16、17、18、20も同じ。)
- 5 梁啓超…1873～1929、清末から民国初期にかけての啓蒙思想家、政治家。字は卓如、号は任公、飲冰室主人とも称した。広東省新会県の人。幼時から聡明で、十六歳のとき、康有為に学んで革新運動に入り、「時務報」を発行し(1896)、時務学堂を設立し(1897)、保国会を組織する(1898)など、戊戌変法の中心人物の一人として活躍したが、失敗して日本に亡命した。
- 6 朱光潜…1897～1986、安徽省桐城の人。中国で著名な美学家、文芸理論家、翻訳家。
- 7 宋白華…1897～1986、最初の名は宋之樾、字を白華。安徽省安慶の人。
- 8 民主…原文は「徳先生」。徳漠克拉西demokelaxiの徳を当てはめたdemocracyのこと。
- 9 科学…原文は「賽先生」。賽因斯zsa iyinsiの賽を当てはめたscienceのこと。
- 10 国粹…国粹的なもの、民族的なもの。旧時の中国文化の精華。保守的・盲目的な崇拜の意味を含む。
- 11 結社…何人かの人が特定の目的達成のため継続的な結合関係を結ぶことを意味し、ここでは同じ志を持った文人のグループを意味する。詩社、書社、画社、印社の社であり、民間、私的なもの。現在使われている社中もこの意味である。
- 12 文人墨客…詩文・書画などの教養を持ちあわせ、文雅なことによく従事する人のこと。
- 13 呉昌碩…1844～1927、名は俊卿。昌碩は民国以後に使用した字であり、他にも字として香補、蒼石を用いた。号は劍候、老蒼、苦鉄などその数は非常に多い。死後に弟子たちによって贈られた諡を貞逸先生という。
- 14 鄭孝胥…1860～1938、江蘇省蘇州に生まれた。孝胥の名は生家が蘇州の胥門内にあったことに因む。字は太夷、号は蘇龕、また蘇戡。晩年の居を海蔵楼と言ったため、後世、鄭海楼とも称される。
- 15 陳宝琛…1848～1935、字は伯潜。同治戊辰の進士で、内閣学士南洋大臣として政治外交の大手腕を奮った。学問は宋学に近く、王安石の詩は学ぶべきものであるという見解をもち、杜甫の詩を嫌っていたという。彼の詩は推敲を極め、常に清新の意味を有する古詩が多い。(橋川時雄編『中国文化界人物総鑑』名著普及会、1982年3月出版)
- 16 趙世駿…生年未詳～1928、字は声伯、号は山木、室号を曼陀羅室といった。書は鍾繇、王羲之に学び、中年以

後は専ら褚遂良に傾倒した。

- 17 譚延闓 ·· 1880～1930、幼名は宝璐、字を組安といい、慈畏、無畏、畏公などと号した。民国時代に政治家として活躍したが、能書家としても知られ、顔法に傾倒した。
- 18 曾熙··1861～1930、字は子緝、号は農髯など。晩号をとって曾農髯と呼ばれることが多い。書作品の伝存例が多く、揮毫の形式も多岐に及んでいる。書体としては楷書が多く、隸書がこれに次ぐ。
- 19 姚華··1876～1930、字は重光、号は茫父。光緒甲辰の恩科進士で、官は工部主事となる。進士館から選ばれ派遣されて日本の法政大学に留学。帰国してからは郵伝部主事になり、参議院議員、清華学校国文教員等を歴任。革命後は衆議院議員、参議院議員、女子師範学校校長、朝陽大学教授に任じたが、晩年は金石の嗜好にかくれた。(橋川時雄編『中国文化人物総鑑』名著普及会)
- 20 于右任··1879～1964、原名を伯循、字を右任といい、騷心、大風、太平老人などの号がある。遺墨が豊富にあり、日本にも晩年の作を中心として精品が数多く伝えられている。草書を素材にした作品が大半をしめる。
- 21 簡牘··古代、文字を記すために用いた竹札。転じて手紙、書物をいう。簡策、簡冊、とも同意に用いる。
- 22 「書法指導」··1989年3月中華書局発行『飲冰室合集』第12巻「飲冰專集之一百二」に収められる。その内容は、
(甲) (乙) (丙) (丁) (戊) に分けられ、次のように構成されている。
(甲) 書法是最優美最便利的娛樂工具 (書法は最も優美で最も便利な娛樂の道具である。)
一、可以獨樂 (独りで楽しむ)
二、不択時不択地 (時間を選ばず、場所を選ばず)
三、費錢不多 (費用があまりかからない)
四、費時間不多 (時間があまりかからない)
五、費精神不多 (労力をあまり使わない)
六、成功容易而有比較 (成功しやすく比べられる)
七、取撰身心 (心身を落ち着かせる)
(乙) 書法在美術上的價值 (書法の美術における価値)
一、綫的美 (線の美)
二、光的美 (光の美)
三、力的美 (力の美)
四、個性的表現 (個性の表現)
(丙) 模仿与創造 (模倣と創造)
(丁) 碑帖之選択 (碑帖の選択)
一、跡真字好 (筆跡が本物で字のよいもの)
二、物美價廉 (美しく安い値段のもの)
(戊) 用筆要訣
A、執筆
一、指密 (親指、中指、人差し指の三本をくっつけて書く)
二、拳空 (たなごころに空間をもつ)
三、腕活 (手を動かす)
四、筆正 (筆は正しく)
五、鋒齊 (筆先をそろえる)
B、運筆
一、画平 (横画水平)

- 二、 豎直（縦画垂直）
- 三、 中満（中間に気を満たす）
- 四、 転適（回転は力強く）
- 五、 鋒回（筆を戻す）

- 23 沈尹默・1883～1971、浙江省呉興県の人。京都帝国大学文学科卒業。北京燕京、中法各大学教授を経て、民国17年河北省政府委員兼教員丁長、同20年国立北平大学校長となる。著に『秋明集』がある。（『現代中華民国満州帝国人名鑑』）
- 24 北大・北京大学の略称。1898年京師大学堂として創立し、民国成立とともに国立北京大学と改称。中国近代化運動の拠点となる。1949年新中国建国により改組される。
- 25 高羅佩・1910～1960、陸軍中將ウィレム・ファン・ヒューリックの五男としてオランダに生まれる。1935年オランダ駐日大使館員として赴任。自らの漢名を「高羅佩」とし、字を「芝臺」と決めた。この時期中国や日本において中国古書、書画等を意欲的に収集し、「集義齋」と名付け、書齋に保管していた。この書齋は太平洋戦争時に失われた。また、中国で古琴を葉詩夢に学び、The Lore of The Chinese Lute, An Essay In Ch' in Ideology (Tokyo, Sophia University, 1940; repr. 1969、邦題『琴道』)を上梓。また、彼は書を嗜み、欠かさず練習していたという。
- 26 『書林藻鑑』・書学の論著。馬宗霍編。12巻。前に民国23年（1934）自序、引用図書目録がある。本書は歴代書法評論資料集である。時代の前後に基づき人物をもって綱目とし、上は伝説の時代から、下は清末まで、全部で2817人を収め、文集と方志を除いて全部で367種引用している。本書は近代以来、最多の人物を収める書家の伝記資料である。陳氏は本文の中で1817人としているが、2817人の誤りである。なお、実際には2822人を数えられる。（陳滯冬『中国書学論著提要』成都出版社、1990年6月出版、373頁）
- 27 『書林紀事』・書学の論著。馬宗霍編。4巻。前に民国24年（1935）自序がある。本書は歴代書法家の逸事を収集し、人物の身分で配列する。（陳滯冬『中国書学論著提要』成都出版社、1990年6月出版、373頁）
- 28 陶九成・元末明初の人、名は宗儀。南村・玉霄真逸と号した。浙江省黄巖の人。元末、進士に挙げられたが就かず、明に入って洪武6年（1373）徴せられたが、病を理由に辞している。古学に博通し、とくに字学に精しく、詩文にも長じていた。陶宗儀の編著は『書史会要』の他、数が多い。（『中国書論大系』第8巻・元、二玄社、226頁）
- 29 『書史会要』・9巻・補遺1巻。巻1から巻8までは、歴代の能書家1662人の小伝と外域15国の文字について輯録し、巻9は「書法」と題して、秦の李斯より元の鄭杓に至る43人の書論50種を抄録する。補遺には468人を加え、さらに既述の30人について考証を補っている。（同上）
- 30 『書学史』・書学の論著。祝嘉著。1冊。前に民国31年（1942）の于右任の序があり、民国30年（1941）の自序がある。本書は全部で15章で、清代以前の中国書法史を論じ、文献の引用を重視し、書物の考察の要点を取り上げている。他に『書学格言』などがある。（孫洵編著『民国書法史』江蘇教育出版社、1998年9月出版、383頁）
- 31 林語堂・1895～1976、上海セント・ジョーンズ大学卒。アメリカ、ドイツに留学。帰国後、北京大学英語学教授。1936年アメリカに渡る。『生活の発見』『北京好日』によって国際的に知られ、『わが国土・わが国民』ほか多数の著書がある。（合山究訳『蘇東坡（下）』講談社学術文庫、1990年7月出版、353頁）
- 32 『中国人』・林語堂は「My Country and My People」を英語で執筆し、1939年にニューヨーク（John Day）で出版した。それが国内外で有名になり、ノーベル賞を受賞し、また賽珍珠が序文を書き、さらに有名になった。ユーモアがあり美しい文章で中国人の生活と背景・性格・心の奥底・人生の理想・社会生活と政治生活を書いている。

- 33 『蘇東坡伝』・艱難に満ちた蘇東坡の人生を「THE GAY GENIUS—The Life and Times of Su Tungpo」というタイトルで、林語堂が書いたもの。中華民国以後、「文人」というものに対する評価の低落現象がおこったが、林語堂は蘇東坡をもちあげてこの書物を著した。蘇東坡の得意とする文学や芸術についてのみならず、蘇東坡を全体的にとらえ、豊かな人間像を余すところなく書いている。
- 34 許思園・1903～1974、哲学者。原名は泰康。号は思玄。無錫に生まれる。1927年、上海同済大学で勉強していた時、英文で哲学論文を書き、国内外の学者から好評を得た。1933年奨学金を得て留学。1938年パリで博士学位取得。1945年プリンストンに卜居し、アインシュタインと宗教と中国哲学の諸問題について論争をした。留学期間中、『相对論批判』、『活動力学基礎及び基本的哲学に含まれる意味』を著した。1945年末に帰国し、すぐに中央大学の教員になる。1950年山東大学の歴史学部の教員になる。1957年「右派」分子とみなされ、英語を教える。病によりこの世を去る。
- 35 「中国書法の美学思想について」・翻訳文が平凡社『中国書道全集』第7巻に「中国書法における美学思想」として収録されている。
- 36 章太炎・1868～1936、近代中国に生き残った古い学問の代表者の一人。字は枚叔、号は太炎、浙江省余姚県に生まれる。著書に、『国故論衡』『莊子解故』『春秋左氏読』『古文尚書拾遺』『齊物論釈』他多数。（『世界歴史事典』第4巻、平凡社、703頁）
- 39 錢玄同・1887～1939、最初の名は師黄、のち改めて夏と名のる。浙江呉興の人。
- 38 卓君庸・1986～1977、名は定謀、福建閩県の人。日本に留学の経験があり、書は草草に優れ、当時に名を馳せた。北平中国実業銀行經理、国立北京大学国文系講師を歴任する。著書に、『有青社詩稿』『英華習語辞典』『銀行事務解説』がある。（憚茹辛編著『民国書画彙傳』台湾商務印書館発行、1986年6月）
- 39 王世鏗・1868～1933、字は魯生、鉄了、鉄老人と号した。
- 40 『標準草書』・古くから草書は芸術的な造形的書体であったため、于右任は一文字ごとに草書を定め、草書の進展と普及に貢献した。『標準草書千字文』を編んだことは、秦の始皇帝の成し遂げた文字改革以来の画期的なものとも考えられよう。
- 41 書法家協会・1980年5月に建国後初の全国的規模を誇る展覧会「第一次全国書法篆刻展覧会」が開催され、翌81年5月には中国書法家第一次代表大会が召集されて中国書法家協会が発足し、国家機構に組み込まれた書法家組織が誕生した。（大修館書店『中国百科』〈文化・書道〉河内利治著、1986年9月出版、268頁）
- 42 右派・1956年のフルシチョフのスターリン批判以後、中国共産党の想定した枠を超えて中国共産党の支配自体を批判する者が現れ始めた。彼らに対して展開されたのが1957年の〈反右派闘争〉である。しかし、党の内外に十分な民主主義が存在しない条件のもとで、特権に固執する幹部の反撃が加わり、正直に正当な批判をした者の多くが〈右派〉として圧迫されるにいたった。（大修館書店『中国百科』〈歴史・近代以降〉三好章著、1986年9月出版、54頁）